

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 17 日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2014

課題番号：22520279

研究課題名(和文) 中世英文学における異文化接触

研究課題名(英文) Cross-cultural contacts as evidenced in medieval English literature

研究代表者

和田 葉子 (WADA, YOKO)

関西大学・外国語学部・教授

研究者番号：00123547

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：これまで中世英文学の作品はイングランドで書かれたという前提のもとに研究が行われてきたが、他の地域で制作されたものも少なくない。中でも、周縁地域と見做されているアイルランドで1330年頃、一人の写字生によって筆写された大英図書館所蔵の写本Harley 913には、優れた作品が多く収録されているにもかかわらず、本格的な研究はほとんどされていない。ラテン語、英語、フランス語で書かれたこの写本には、宗教作品や修道会の記録に加えて、諷刺詩やパロディが収められている。中世アイルランドの社会状況を考慮し、作品の正しい解釈を示すことによって、この写本に様々なジャンルの作品が集められている理由を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Medieval English literature has been studied, in most cases, on the assumption that the literature was produced in England. However, many works were composed in the neighboring areas of the British Isles, notably, Scotland, Wales and Ireland; for that reason, they have not received the full attention they deserve. A particular example of this neglect is a scholarship of London, British Library, MS Harley 913. The manuscript written by a scribe in about 1330 in Ireland contains satires and parodies as well as serious religious verse and prose in Latin, English and French, the three languages current in medieval England. To remedy this I have systematically attempted an interpretative re-appraisal of English poems in the manuscript, taking into account the religious and political circumstances in which they were composed in medieval Ireland. My findings not only help us understand the poems better but also the nature of the manuscript as miscellany which is not understood up to now.

研究分野：中世英語英文学

キーワード：中世英文学 アイルランド 中英語 ラテン語 フランス語 写本 MS Harley 913

### 1. 研究開始当初の背景

(1) これまで中世英文学はイングランドで書かれた作品であることを前提として、研究が進められてきた。中世スコットランドにおける英文学は英文学史でも取り上げられるが、イングランドの文学の亜流としての扱いを受けている。1999年、David Wallaceが *The Cambridge History of Medieval English Literature* (New Cambridge History of English Literature (Cambridge: Cambridge University Press)) を出版し、中世英文学の作品をより広いコンテクスト、すなわちスコットランドに加えて、ウェールズとアイルランドも視野に入れ考察する試みが始まった。中世英文学を正しく理解するためには、周縁地域を含めた英文学を調査研究する必要性があることを強く感じた。

(2) さらに、写本研究を本格的に導入する必要があると考えた。イングランド以外の地域で書かれた中英語を収録した写本を調査することによって、作品について多くの事実が明らかにされるからである。写本研究には本文のテキストの内容と言語の状況だけでなく、写生字や、当時のあるいは後の読者によるテキストおよび欄外への書き込みがあり、製本の状態などからも、写本が筆写された場所や、所有者、利用目的等がわかる。このようにして、作品がどのようにして生まれ、他の地域へと普及していったのかを知ることができる。中世文学研究には写本研究は欠かせないのだが、今回の研究申請当時は、まだ、過去に編纂され出版されているテキストをベースにした研究が海外でも多かった。

### 2. 研究の目的

(1) 長い間、中世英文学の作品はイングランドで書かれた、という前提のもとに研究が進められてきた。しかし、現存する写本の中には、ウェールズとイングランドの境界地域や、アイルランドで制作されたものが多くある。それらの地域の社会、文化、政治、宗教などが、作品あるいは写本の成立過程に大きな影響を与えているにもかかわらず、このような観点から中世英文学を考察する研究は非常に遅れている。イングランドの周縁地域で生み出された英文学に光を当て、従来の中世英文学研究ではほとんど無視されてきた作品群を評価し、それらの優秀性と地域性を明らかにする。

(2) また、中世英文学を正しく理解するために必要な写本学を今回の研究に取り入れる。写本そのものに目を向け、特に周縁地域で制作された写本から知りうる歴史的、地理的情報を収録作品の内容と重ね合わせてテキストを解読し、成果を発表する。

### 3. 研究の方法

(1) 扱う作品については、ウェールズとアイルランドそれぞれと異文化接触している3種類の写本/作品群、すなわち、13世紀中ごろ

に英語、フランス語、ラテン語で書かれた修道女の手引き、*Ancrene Wisse* の写本と、1340年頃の写本である London, British Library, MS Harley 2253 に収録されている、抒情詩を集めた、いわゆる Harley Lyrics、そして、1330年頃筆写され、ラテン語、英語、フランス語による作品が収録されている London, British Library, MS Harley 913 の写本に収められている作品を取り上げた。当時の社会状況に照らし合わせて、作品を読み、正しい解釈を示した。

(2) 上記の作品の写本を大英図書館で調査するとともに、ケンブリッジ大学図書館では、これらの写本が書かれた時代と地域についての資料を、著作権の許す限り A4 サイズにそろえてコピーし持ち帰り、帰国後、国内でも研究が途切れず続けられるようにした。ケンブリッジでは、現地の同分野の研究者とディスカッションの場をもち、情報交換をした。アメリカ合衆国ノースカロライナ大学にも優れた中世研究者が多く、大学図書館も中世関係の書籍がそろっているので、そこでも調査研究をスムーズに進めることができた。アイルランドで書かれた写本 Harley 913 については、アイルランド国立図書館だけでなく、写本が制作されたと考えられているウォーターフォードの市立図書館でも郷土史に関する資料を収集することができた。

### 4. 研究成果

#### (1) 研究の主な成果

13世紀中ごろに英語、フランス語、ラテン語による修道女の手引き、*Ancrene Wisse* は、その方言からイングランド中西部の作品であることがわかる。また、ウェールズ語の語彙が使用されているので、中西部でもウェールズの境界に近いところで書かれたことが推測される。*Ancrene Wisse* の初期の写本の1つ、Cambridge, Corpus Christi College, MS 402 には、John Purcell という人物が Wigmore 大修道院にこの写本を寄贈したというラテン語による記述がテキストの欄外に、13世紀と思われる筆跡で記されている。Wigmore からウェールズの境界まで13キロほどの距離である。*Ancrene Wisse* が完成してから1世紀少し経過した1340年頃、*Ancrene Wisse* と同じ地域で、London, British Library, MS Harley 2253 が筆写された。この写本には多くの抒情詩が収められていて、Harley Lyrics と呼ばれている。当時、人々の間で歌われていた、人間の感情を豊かに表現する詩がたくさん含まれている。このような詩は書き留められることが少ないので、現存する貴重な中世抒情詩の資料となっている。アイルランドに関する内容の詩がいくつも見られ深い関係があったことが知られる。当時のウェールズの境界地域に住んでいた豪族たちはアイルランドと頻りに接触があり、アイルランドにも大きな土地を所有していた。初代のウェールズ境界地域の伯爵、ロ

ジャー・モーティマー (1287-1330)はアイルランド総督となって、アイルランドをイングランドの支配下に置くため戦う。MS Harley 2253 の最後の見返しには 1312 年までのアイルランドに関する記録があり、この写本とアイルランドの深いつながりを示している。

アイルランドでは、MS Harley 2253 より 10 年ほど前の 1330 年頃に、London, British Library, MS Harley 913 が筆写されていた。この写本はおよそ縦 140 ミリ、横 95 ミリという小さなサイズで 64 葉から成り、ラテン語、中英語、フランス語で書かれている。収録作品のジャンルは様々で、説教や祈り、瞑想や聖フランシスコ修道会に關係する記録に加え、辛辣な諷刺詩やパロディも収められている。一見、まとまりのないような作品群を、一人の写字生/編纂者がなぜ一冊の写本に書いたのか、については、海外でも論じた研究者はいないが、今回研究によって一石が投げられた。また、2つの言語、英語とラテン語で書かれた作品が収められており、何故、両言語なのか、についても、これまで論じられたことはなかった。この興味深い写本と収録作品について、下記のように多くの事が明らかになった。

中世ヨーロッパには、説教をしながら各地を放浪する托鉢修道士がいた。彼らは若い学生たちで、旅は聖職者になるための修行であった。MS Harley 913 の作品には、アイルランドの地名が見られ、狭い共同体の中で起こった歴史的事件を歌ったものもあることから、放浪する托鉢修道士が各地に伝えられていた歌を書き留めたことが推測される。イングランドの当時の状況を知っていたことが察せられる内容もあるため、広く旅した者であったことがわかる。

アイルランドの市場の様子を、皮肉たっぷりに歌った詩 *Satire* には、様々な職種の人々が登場する。研究の結果、聖マイケルの祝日に毎年開かれていた市場の様子を描いた作品である可能性が高いことがわかった。各スタンザの終わりには、繰り返し作者が詩作の才能を自画自賛し聴衆の笑いを誘う。最終スタンザから、人々とともに酒を飲みながら歌われたことが明らかである(下記の論文、学会発表 参照)。

*Piers of Bermingham* は 1308 年に亡くなったオファリーの領主 Piers of Bermingham を弔う称徳の詩である。しかし、そこには、彼がアイルランド人を追いまわし殺害する様と、三位一体の祝日にアイルランド人の豪族を彼の城に招き殺戮した事件が描かれている。この詩が Piers を賞賛しているのか、あるいは、諷刺詩であり、彼を非難しているのか、研究の結果、諷刺詩であるが、それにも増して作者が作品に込めたかった思いはアイルランドの血にまみれた戦乱の現世に対するやるせなさであったことが察せられる(学会発表 参照)。土地に非常に密着した事件が扱われているので、それを記した年史

を調査しなければならなかった。

作者が大学で学んだ経験があることを示す作品は *Nego* である。「私は否定する」を意味するラテン語の *nego* を含め、中世の論理学の問答集によく見られる他のラテン語の動詞を交え、神学より論理学に重きを置くことが流行った時代を諷刺した。当時、神学と論理学の学者の間で起こった論争について知らなければ、この詩を正しく理解できない。

*The Land of Cockaygne* (コケインの国) と *Elde* (老年) も聴衆を楽しませる作品である。諷刺詩 *The Land of Cockaygne* では、修道士たちが、楽園よりも心地よいコケインの国で、女子修道院まで空を飛んで行き、自由奔放な修道女を捕まえて快楽に耽る。その国で暮らしたければ、7 年間、豚の糞に顎まで浸かり泳いで行かなければならないという。空を飛ぶ修道士は天使を、空の高さは徳の高さを、象徴しているという説が主流であったが、貴族や富裕な大修道院の修道士たちの鷹狩の遊びを、諷刺詩に取り込んだと考えるほう分かりやすい(論文 参照)。*Elde* は老いのために五感と体力、精力が衰え、みじめな思いをしている老人のつづやきを詩にした作品である。一種のパロディで、中世の人間の最期についての厳肅な宗教詩を思い起こさせる詩行を使って、面白おかしい、頭韻も駆使し、聞いたときに耳にも滑稽な響きを持つ優れた詩に仕上がっている。最終行では、ついに死が老人の足元から忍び寄ってくる(学会発表、参照)。そして、このすぐ後に筆写されている作品は *Erth* (土) である。

*Elde* は、人間は土から生まれ死んで土に帰る、というキリスト教の考え方をテーマにした詩である。英語とラテン語のスタンザが交互に配置されており、ほぼ同じ意味の英語とラテン語のスタンザが対になっている。研究の結果、英語が翻訳されてラテン語版が作られたと考えられる。英語では *earth* の持つ土と地面の両義を組み合わせて詩にまとめているが、ラテン語版では、語彙にバラエティがあり、「土、地面」の両義を表すのに *terra*、*uesta*、*humus* を使用し、ラテン語版でも見事に言葉遊びをしている(論文、学会発表、参照)。

さらに 2 か国語による作品として、*Lollai* (子守唄) がある。英語による最古の子守唄で、あり、聖母マリアがイエスに語りかけるのではなく、母親が人間の子供に、乱世に生まれて可哀そうだ、という内容になっており、このような例は他にない。上記の *Erth* や *Elde* 同様、多くの人々によく知られていた歌を元にしていて、聴き手が通常の内容を予想している時に不意を衝き、独創的な作品のインパクトをより強くしようという狙いなのだろう。この英語の子守唄のラテン語版が同写本の別のページに書き留められているが、今回の研究によってラテン語版は英語からの翻訳であることが推測できた。(論文 参

照)。

ラテン語で書かれた *Missa de Potatoribus* (飲んだくれのミサ)は、ラテン語の典礼を、ラテン語でパロディに仕上げた作品である。厳かであるべきミサが、酒と博打と女と泥棒の内容に変わっている。テキストは、ミサが筆写される際のレイアウトと色使いで写されているため、視覚的な意味でも凝ったパロディとなっている。神を冒瀆するかのようなテキストがこの写本に収められている理由を明らかにする鍵は、作品に描かれている石を投げつけられて酒場を追い出される男の場面である。これは、石を投げられて死んだ聖ステファノを連想させる。聖ステファノの祝日(12月26日)は、「愚者の祭り」という副助祭がその日だけ司教に扮し本物の錫杖を手にして、司教の役割を果たす日だった。無礼講であり、どんな馬鹿な振る舞いも許された。この作品には司教の権威の象徴である錫杖の言及があり、身分が非常に低い勉強中の学生である副助祭がこの日にパロディのミサを執り行ったと考えられる。(学会発表参照)。

(2) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

これまで国内外でほとんど注目されていなかった写本、特に、1340年頃アイルランドで書かれた MS Harley 913 の研究成果は英文でも発表した。海外の同分野の研究者からは非常に良いコメントをもらっている。本格的に研究されてこなかった個々の作品の優れた点、正しい解釈、そして、愚者の祭りとの関係については、初めて論じられたので、その意義はたいへん大きいと考えられる。

(3) 今後の展望

今後は、特に MS Harley 913 を取り上げ、この5年間に取り上げるのでできなかった英語だけでなく、ラテン語、フランス語の作品も含めて、この写本の全作品のテキストを編纂するとともに、社会背景と合わせて正しく解釈し、単行本として英文で刊行し、新しい知見を広く海外にも発信する。そして、イングランドの他の地域で生まれた中世英文学が今後、もっと注目され、研究対象として取り上げられるよう、これからも貢献を続けてゆきたい。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

和田 葉子、ロンドン大英図書館所蔵 Harley 913 写本に収録された中英語詩 *Lollai* とそのラテン語版の関係について、関西大学東西学術研究所紀要、査読無、48 輯、2014、pp. 127-136

和田 葉子、The bilingual poem *Erth* in London, British Library, MS Harley 913: possible relationships between the Latin and the vernacular parts、関西大学外国語

学部紀要、査読無、11号、2014、pp. 43-59  
和田 葉子、The poem known as *Satire* from London, British Library, MS Harley 913: a new interpretation、関西大学東西学術研究所紀要、査読無、46 輯、2013、pp. 83-100  
和田 葉子、コケインの国を求めて 空飛ぶ修道士とその餌食についての一考察、関西大学東西学術研究所 60 周年記念論集、査読無、関西大学出版部、2011、pp. 281-291 [学会発表] (計7件)

和田 葉子、中世の無礼講「愚者の祭り」と London, British Library, MS Harley 913、関西大学東西学術研究所研究例会、2015年2月26日、関西大学東西学術研究所(大阪府吹田市山手町)

和田 葉子、中世の謎かけ? その心は? London, British Library, MS Harley 2253 の抒情詩 *Erthe upon Erthe* について、関西大学東西学術研究所研究例会、2014年2月10日、関西大学東西学術研究所(大阪府吹田市山手町)

和田 葉子、パロディになった最期と死の中世詩? London, British Library, MS Harley 913 収録の *Elde* と *Erth* について、第29回日本中世英語英文学会全国大会、2013年11月30日、愛知学院大学(愛知県日進市岩崎町)

和田 葉子、中世アイルランドのある老人のつぶやき London, British Library, MS Harley 913 収録の中英語詩 *Elde* についての一考察、関西大学東西学術研究所例会、2013年2月22日、関西大学東西学術研究所(大阪府吹田市山手町)

和田 葉子、The poem *Nego* of London, British Library, MS Harley 913: a revolt against contemporary dialectics at the universities?、日本英文学会全国大会(シンポジウム第10部門“Negotiating Linguistic Boundaries in Old and Middle English Literature”)、2012年5月27日、専修大学(神奈川県川崎市多摩区)

和田 葉子、中世アイルランドの風景と音と匂いと London, British Library, MS Harley 913 の中英語詩 *Satire* についての一考察、関西大学東西学術研究所研究例会、2012年2月20日、関西大学東西学術研究所研究(大阪府吹田市山手町)

和田 葉子、英雄か極悪人か *Piers of Bermingham* 成立の社会背景について、日本中世英語英文学会全国大会、2011年12月3日、大東文化大学(東京都板橋区高島平)

[産業財産権]  
出願状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:

国内外の別：

取得状況（計0件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

和田 葉子(WADA, Yoko)

関西大学・外国語学部・教授

研究者番号：00123547

(2)研究分担者

なし